

備忘録：『冷血』執筆の足跡

大 園 弘

2004年にカポーティの書簡集が出版された。*Too Brief a Treat: The Letter of Truman Capote* (Vintage Books)と題されたこの作品には、カポーティが1936年から1982年にかけて親族や知人に書き送った手紙類（電報を含む）が大量に収められている。その数は凡そ450通にも及ぶ。周知の通り、編者クラークは大著*Capote: A Biography* (1989)の著者であるが、彼自身*Capote*を著すにあたり、やがて*Too Brief a Treat*に収録することになる数々の手紙を貴重な情報源として利用したようである。*Capote*の中での記述に符合しあう内容（手紙）の数々が*Too Brief a Treat*の中に散見できるからである。四部からなる後者の第三部（“1959–1966 Four Murders and a Ball in Black and White”との章タイトルが付されている）は、そのかなりの部分が*In Cold Blood*（以下『冷血』と略記）の執筆過程でカポーティが如何なる努力を重ね、苦悩を体験したかという点をはじめ、『冷血』をめぐる様々の「逸話」を綴った手紙類からなっており、『冷血』の創作過程を跡づけるうえで貴重な資料となっている。

本稿では、主としてこの第三部（全155頁・175通）に依拠しながら、『冷血』に関する興味深い執筆の過程を時系列的に跡づけている。記載要領は年表形式とし、表中の年月日欄については、手紙類の場合は差出日を記載したうえで、（ ）内に発信地を記している。また、事項欄の＜ ＞には宛先を記している。なお、事項欄には主として『冷血』の執筆過程と関連が深い内容及び移動予定を取り上げることとし、必要に応じてテキスト（*In Cold Blood* ランダムハウス刊初版）の該当ページを【→】内に掲げている。

《 》内の記述は、筆者による注釈である。

年 月 日 (発信地)	事 項
1959年	
11月15日	クラター氏一家殺人事件発生。《殺害推定時刻：14日午後11時～15日午前2時》
16日	カンザス州捜査局 (KBI) の主任捜査官アルヴィン・デューイが記者会見に臨む。【→81】
18日	クラター家の葬儀。
12月30日	ラスヴェガスで犯人逮捕。【→211-212】
1960年	
1月 6日	犯人らがラスヴェガスからカンザス州フィニー郡の郡庁舎に送還される。
21日(Brooklyn)	＜Cecil Beaton宛＞ほぼ2ヶ月ぶりにカンザスからニューヨークに戻ったと伝える。
22日(Brooklyn)	＜Dewey夫妻宛＞ランダムハウスと『冷血』の出版契約を結んだと伝える。
3月22日	裁判初日。
29日	陪審員による有罪（死刑）判決。処刑予定日は同年5月13日。
4月17日(大西洋上)	＜Dewey夫妻宛＞海路スペインのパラモスに向かうと伝える。
28日(Palamos)	＜Dewey夫妻宛＞パラモスに到着し、『冷血』の執筆開始。1956年、57年、58年のそれぞれ11月14日のナンシー・クラターの日記の記載内容を教えてほしいとアルヴィンに要請する。【→57., 83-84】
5月17日(Palamos)	＜Dewey夫妻宛＞クラター邸の建築年《1943年か53年か》、ホルカムからコロラド州境までの距離、刑執行の新たな日程が設定されたか、を質問する。6月1日にパラモスからブラヤ・デ・アロの一軒家に移る予定《10月まで滞在予定》であることを知らせる。
6月20日(Playa de Aro)	＜Donald Cullivan宛＞ペリーのハンガーストライキが5週目となり、刑務所の病院で静脈注射の治療を受ける。カポーティはカリヴァンに、ペリーとカリヴァンの会話の場面【→マイヤー夫人が用意した夕食を両者が共にする場面：289-290】に関して、料理の内容やテーブルセットの様子を教えてほしいと要請し、併せて、自分がペリーとの対話で得た素材を、(作品の中では) その場面でカリヴァンが語ったようにアレンジしてもよいかと許可を求める。
7月29日(Playa de Aro)	＜Dewey夫妻宛葉書＞ペリーとディックの精神鑑定にあたったメニンジャー・クリニックの精神科医 (サテン博士) を滞在先のロンドンに訪ねる予定であることを知らせる。
8月12日(Playa de Aro)	＜Dewey夫妻宛＞ロンドンからブラヤ・デ・アロに戻ったこと、ロンドンでサテン博士からペリーとディックに関する新しい資料の提供を受けたことを報告する。
15日(Playa de Aro)	＜Cecil Beaton宛＞ロンドンでの滞在が2日間だったこと、

9月 6日(Playa de Aro)	11月初旬にはスイスのヴェルビエに移る予定であることを伝える。 ＜Andrew Lyndon宛＞ブラヤ・デ・アロの滞在が10月25日までであることを伝える。
15日(Playa de Aro)	＜Andrew Lyndon宛＞『冷血』の完成にさらにもう2年かかりそうだと伝える。
22日(Playa de Aro)	＜Richard Avedon宛＞ペリーの体重がハンストのせいで168ポンドから112ポンドに落ちたこと、ペリーが幻覚を見るようになったこと【→318】、ディックの父親がガンで死亡したことなどと伝える。
10月 2日(Playa de Aro)	＜Newton Arvin宛＞スイスのヴェルビエに翌年4月までアパートを借りたこと、翌年の4月までには『冷血』の半分を書き終えていたいという期待を抱いていることを伝える。
5日(Playa de Aro)	＜William Shawn宛＞《ニューヨーカーの編集者ウィリアム・ショーンに、》ヴェルビエでの暮らしが落ち着いた頃、『冷血』の第一部（原稿）を送る予定であること、クラター事件に関するFBIによるインタビューの公式記録を入手できたことを伝える。
10日(Playa de Aro)	＜Dewey夫妻宛＞ブラヤ・デ・アロを10月28日に発つ予定であること、61年4月末までヴェルビエに滞在する予定であることを伝える。デューイに対し、ベヴァリーとエヴェンナのどちらがナンシーの腕時計が彼女の靴の中にあるのを発見したのか【→102】、また、ケニヨンのラジオがなくなっているのに気づいたとき、ヘルム夫人と一緒にいたのは二人のうちどちらか【→102】を尋ねる。追伸で『冷血』の第一部を書き終えたことを伝える。
17日(Playa de Aro)	＜Donald Windham宛＞『冷血』の第一部(35,000語)が完成したこと、全体では125,000語ほどにもなりそうなので、ニューヨーカーに掲載してくれるかどうか心配であること、クラター事件の調査に8,000ドル以上を費やしたことなどを伝える。
11月 9日(Verbier)	＜Newton Arvin宛＞『冷血』の35,000語ぶんを書き上げたが、これから70,000語ぶんの分量を書かなければならないこと、ルポルタージュものは『冷血』が最後になること、自分が試みた文学上の新しい手法によって『冷血』が素晴らしい芸術作品になるであろうこと、『冷血』の素材に対して情緒的に深く関りすぎてしまったために早く終わりを迎えたいと望んでいること、『冷血』を完成させるまでは帰国しないと自らに誓っていることなどを伝える。
10日(Verbier)	＜Donald Windham宛＞クリスマス休暇（12月18日～61年1月8日）をミュンヘンで過ごす予定であると伝える。 ＜Dewey夫妻宛＞マートル・クレアの母トルート夫人のファーストネームがサディー（Sadie）だったかどうか、併せてホー

24日(Vervier)	<p>マー・クレアの没年を尋ねる。ニューヨーカーのショーン氏が『冷血』の第一部をととても気に入っていること、現在第二部の執筆に取り組んでいること、デューイとその妻マリイが作品の至る所に登場することを伝える。</p> <p><Dewey夫妻宛>送られてきた新聞の切抜きに対し礼を述べる。ディックと減刑審理に関して、どのような裁定が下されるのかを知らせてくれるよう依頼する。『冷血』の第三部も第一部同様の長さになること、第二部と第四部も短くはないこと、全てのパートに苦心していることを伝える。</p>
12月29日(Munich)	<p><William Styron宛>『冷血』執筆への激励に対し礼を述べ、執筆の速度がとても遅いこと、この作品が自分にとってルポルタージュものの最後の作品になるであろうことを伝える。</p>
1961年	
1月14日(Verbier)	<p><John Malcolm Brinnin宛>2月にはロンドンに移り、<i>The Turn of the Screw</i>《ヘンリー・ジェイムズ著『ねじの回転』》の映画の脚本作成に取り組むこと、そのために『冷血』の執筆を6週間中断することを伝える。</p>
16日(Vervier)	<p><Dewey夫妻宛>『冷血』の出版契約を7カ国（イギリス・フランス・イタリア・スペイン・ドイツ・ポーランド・日本）と交わしたこと、作品を読めば、夫妻も自分たち自身が巧く描かれていると感じるだろうということを伝える。</p>
27日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>『冷血』の素晴らしい情報源となる本《内容不明》を送ってもらったことに対し礼を述べる。</p>
1月下旬～2月初旬 (Verbier)	<p><Alvin Dewey宛葉書>保安官事務所の秘書の名前《エドナ・リチャードソン》を尋ねる。【→80】</p>
2月10日(Verbier)	<p><Cecil Beaton宛>8日間のロンドン滞在中に <i>The Turn of the Screw</i> の脚本作成を終え、ヴェルビエに2月9日に戻ってきたと伝える。</p>
3月26日(Venezia)	<p><Dewey夫妻宛>ヴェニスを訪れており1週間ほど滞在する予定であること、その後4月20までヴェルビエで過ごし、その後は7月初旬までスペイン（パラモス）で過ごすことを伝える。レノ（ネヴァダ州）でパトロール中の警官がペリーらの車を発見した件に関して《盗難車に盗んだナンバープレートをつけていた》、アルヴィンが盗難車の車種とナンバーをどのようにして知るにいったのか、を彼に尋ねる。</p>
4月 4日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>4日ヴェニスからヴェルビエに戻ってきて、ペリーとディックの尋問が5月8日に行われることを知らせるアルヴィンの手紙を受け取ったことを伝える。また、その手紙の中で連邦裁判所がペリーらに死刑の執行停止を言い渡す可能性があること知らせてきた点に関して、エンディングの執</p>

23日(Palamos)	筆に差しかかっている『冷血』に終わりが見えない事態に苛立ちを表しながらも、アルヴィン自身の見解を求める。4月20日にスペインのパラモスに戻るということを再度伝える。
5月22日(Palamos)	＜Dewey夫妻宛＞6月23日までパラモスの借家に滞在し、7月～8月は別の借家を探す予定であること、7月1日までには少なくとも『冷血』の半分は書き終えていたい意向であることを伝える。
6月 5日(Palamos)	＜Dewey夫妻宛＞最高裁判所がペリーらの処刑日を決定した際には電報で知らせしてほしいと依頼する。『冷血』の執筆が中盤に差しかかっていること、デュエイン・ウエスト《ペリーらの死刑を主張する郡検事》の登場の場面には至っていないことを伝える。アルヴィンに対し、作品中のアルヴィンの発言の中に"Hell"や"Damn"という間投詞を挿入してよいかどうかを尋ねる。
29日(Palamos)	＜Leo Lerman宛＞9月23日までパラモスに滞在し、それ以降はヴェルビエに戻る予定であると伝える。
7月 4日(Palamos)	＜Dewey夫妻宛＞裁判が新たな展開を迎えるのに、もう1年かそれ以上も待たねばならないと考えたと憂鬱であると伝える。7月8日の《裁判の？》結果《ディックによる連邦裁判所への上告が予想される》を知らせてほしいと依頼する。
11日(Palamos)	＜Andrew Lyndon宛＞パラモスには9月まで滞在予定であること、『冷血』を半分書き終えたことを伝える。
8月某日(Palamos)	＜Bennett Cerf宛＞パラモスには9月末まで滞在し、その後はヴェルビエへ移る予定であることを伝える。
16日(Palamos)	＜Donald Windham宛＞パラモスには9月23日まで滞在し、冬をヴェルビエで過ごす予定であること、『冷血』完成は1年後の9月になりそうであることを伝える。
9月 4日(Palamos)	＜Dewey夫妻宛＞フロイド・ウェルズ《刑務所内でディックにクラター家に関する不正確な情報を与えた人物》が、情報提供の報酬を得たという報道が真実であるかどうかを尋ねる。マリーに、アルヴィンがペリーらの顔写真を持って帰宅した夜のことにしてもっと詳しく聞かせてほしいと伝える。【→164-165】アルヴィンには、それらの顔写真の裏面に記されていた記載事項を教えてほしいと伝える。2度目の上訴に関する裁判所の判決がいつ頃下されるのかを尋ねる。最後の判決の場面に立ち会いたいので、傍聴するためにはどのような手続きが必要なのかを尋ねる。冬はヴェルビエで過ごすのが、その間の1ヶ月ほどはバリで過ごす予定であると伝える。
	＜Dewey夫妻宛＞10月15日か20日ごろまでパラモスに滞在する予定であること、クリフォード・ホープ《『冷血』にも登場する青年弁護士【→148】》に手紙を書き、ペリーらの（裁判の）最後の場面に立ち会えるように手筈を整えてもらう予定であることを伝える。

11月 2日(Verbier)	<p><Alvin Dewey宛>アルヴィンに対し、クラター事件以前に彼が関った殺人事件の履歴(件数)と併せて、そのうちの一件、ウィルマー・リー・ステビンズによる殺人事件(「ブランドジェル事件」)についての詳細を尋ねる。【→151-152】</p> <p>ランダムハウスのショーン氏が、半分書き終えた『冷血』の原稿を読んで、カポーティの作品のうちの最高傑作であると評価していること、デューイ家の面々(子供2人と猫を含む5者)が作品に描かれているように、実際にも魅力的で知的で暖かいのかと興味津々であることを伝える。ジョナサン・ダニエル・エイドリアン《事件後、クラター家に忍び込んで逮捕された流れ者》のその後(刑に処せられたのか、釈放されたのか、その日付)を尋ねる。</p>
3日(Verbier)	<p><Cecil Beaton宛>1962年1月には、2〜3週間カンザスで調査を行うこと、その後数日間ニューヨークに滞在する予定であることを伝える。</p>
21日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>11月22日にロンドンに渡り1週間ほど過ごすこと、その間に <i>The Innocent</i> 《H.ジェイムズ著 <i>The Turn of the Screw</i>の映画化にあたり、カポーティが脚本を手がけた作品》を観る予定であることを伝える。捜査に関する情報提供とメール(Male)誌に掲載されたディックのインタビュー記事("America's Worst Crime in Twenty Years")を送ってくれたことに対し、アルヴィンに礼を述べる。編集前の後者の原稿《インタビューの元の原稿は大幅に縮小された》に興味があると伝える。</p>
12月 3日(Vervier)	<p><Dewey夫妻宛>1962年1月15日から2月15日の間に、夫妻を訪ねることになるだろうということ、ガーデンシティではウォレン・ホテルに滞在し多数の人物にインタビューを行う予定であること、裁判の展開に予測がつかないことに対してひどく苦しんでいること、<i>The Innocent</i>が好評を博したことを伝える。</p>
4日(Vervier)	<p><Bennett Cerf宛>ペリーらの新たな裁判が始まりそうな心配があること、そうなると裁判が終了し『冷血』が完成するまでにさらに2年かかることになり、それを考えると憂鬱になることを伝える。</p>
9日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>新聞の切抜きを送ってくれたことに対してアルヴィンに礼を述べる。ペリーらの新たな裁判が始まり、事態の進展が望めないままさらに2年以上が過ぎることになるのであれば、経済的にも精神的にも参ってしまって、『冷血』執筆の企画を断念することになるかもしれないと、切羽詰った心境を述べながらも、さし当たっては、成り行きを見守りつつ前進し続けるつもりであると伝える。翌月(1962年1月)に予定していたカンザス行きに変更はないことを伝える。</p>

13日(Verbier)	<Marie Dewey宛葉書>カンザス行きの際にはネル・ハーパー・リーも同行すると伝える。
1962年	
2月 9日(Verbier)	<Cecil Beaton宛>ニューヨーク、カリフォルニア、カンザスへの旅を終え、2月8日にヴェルビエに戻ってきたこと、ランシング刑務所でペリーらと面会したことを伝える。
14日(Verbier)	<Bennett Cerf宛>ニューヨークでのもてなしに礼を述べる。『冷血』の原稿を送るので、トリプル・スペースでタイプし、2部をランダム・ハウス社で保管し、マスター・コピーを航空便で送ってくれるよう依頼する。
25日(Verbier)	<Cecil Beaton宛>4月初旬までヴェルビエで過ごし、その後コルシカ島《イタリア半島西部》に移る予定であること、帰国時の大半をカンザスで過ごし、ニューヨークで過ごした5日間のうち2日は風邪で寝ていたこと、『冷血』執筆に没頭しているせいか、現実味をもって感じられるのはカンザスに関わることばかりであることを伝える。
3月 4日(Verbier)	<Bennett Cerf宛>カンザス州の最高裁判所がペリーらの上訴を退けたこと、彼らの弁護士が連邦最高裁判所に上訴することはないと自分では判断していること、専用のサーモファックス用紙が送られてこないで『冷血』の原稿《2月14日付、同氏宛の手紙参照》を未だ送れずにいることを伝える。
14日(Verbier)	<Bennett Cerf宛>『冷血』の原稿を送ったが、こちらが指示するまでコピー《タイプ済みのマスター・コピー》を送ってもらう必要はないと伝える。
4月 5日(Paris)	<Bennett Cerf宛>パリに來ているが、滞在中も毎日『冷血』の執筆に専念していること、4月12日にコルシカ島へ向けて出発する予定であることを伝える。
26日(Corcica)	<Bennett Cerf宛>コルシカ島に來ているが、期待はずれだったのでパラモスに移る予定であること、クリスマスの頃までに『冷血』の80パーセントを書き上げることができれば帰国する予定であること、ホームシックにかかっており、カンザス州を身近に感じられる場所にいたいと望んでいることを伝える。
28日(Palamos)	<Bennett Cerf宛>『冷血』の執筆が、厄介だが興味深いセッションに差し加かっていること、カンザス州最高裁判所がペリーらの上訴を退け、新たな処刑日が7月の第一週に設定されそうであること、連邦最高裁判所への上訴の道は残されているものの、自分としては弁護団が上訴を断念するだろうと予想していること《3月4日付、同氏宛の手紙参照》、法律関係者の間では、向こう12ヶ月のうちに決着がつくと考えられていること、ペリーから50枚にも及ぶ素晴らしい手紙が送られてきたことを伝える。
5月14日(Palamos)	<Bennett Cerf宛>今や『冷血』の執筆に「拘束されている

6月 3日(Palamos)	(imprisoned)』と感じていること、また、それが「病 (an illness)」のようにも感じられると苦境を伝える。 <Donald Windham宛>裁判の成り行き次第では、クリスマス後に帰国すると伝える。
15日(Palamos)	<Bennett Cerf宛>毎日誰にも会わずに『冷血』の執筆に専念していること、カンザス州最高裁判所が来週にもペリーらの処刑日を新たに設定する予定であり、10月1日に設定されそうであること、しかし自分の予想では今回も処刑の執行が停止されるに違いないと考えていること、大半の法律家が処刑執行までには、さらに8ヶ月ほどかかると予測しているということを伝える。
27日(Palamos)	<Newton Arvin宛>『冷血』の完成までには、もう1年か2年かかりそうだということ、クリスマスが過ぎた頃帰国したいと考えており、帰国したら『冷血』の原稿を見せるつもりであることを伝える。
27日(Palamos)	<実父Arch Persons宛>夏をバラモスで過ごし、その後クリスマス頃までスイスで過ごす予定であること、来年(1963年)の2月か3月に帰国し、暫くはアメリカで過ごすが、そのときに会えるのではないかと考えていると伝える。
8月 3日(Palamos)	<Dewey一家宛>マッコールズ誌への原稿執筆のため、2、3週間ほど『冷血』執筆から遠ざかっていること、前者は原稿料稼ぎのための仕事であり、『冷血』以外の仕事に関わることは不本意であると伝える。
8日(Palamos)	<Newton Arvin宛>話題が山ほどあるし、『冷血』の原稿も読んでほしいので、来年(1963年)の3月か4月に訪ねていってもいいかと尋ねる。
8日(Palamos)	<Dewey夫妻宛葉書>滞在先に隣接する森林が火災となり、『冷血』の原稿と関連資料だけをまとめて避難したと伝える。
16日(Palamos)	<Dewey夫妻宛>新聞の切抜きを送ってくれたことに対し礼を述べる。政治が州の最高裁判所の運営に影響を及ぼしうることに不信感を表わす《当時カンザス州の州知事選が展開中であり、それがペリーらの処刑日の設定に影響していることに対して、カポータは苛立ちを露にした》。
23日(Palamos)	<Dewey一家宛>カンザス州の州知事選が終わるまではペリーらの処刑が執行されないはずなのに、現知事のジョン・アンダーソンが処刑日の設定を遅らせている理由が理解できないと怒りを露にする《その後アンダーソンは再選を果たした》。
9月 4日(Palamos)	<Marie Dewey宛>新聞の切抜きを送ってくれたことに対し礼を述べる。
10日(Palamos)	<Bennett Cerf宛>『冷血』の中で最も長い第三部(約40,000語)を執筆中であるが、このパートを書き上げた後に《1963年2月頃と予測》帰国し、最後の第四部をアメリカで執筆する予定であること、とは言え、処刑であれ判決の差し替え

15日(Palamos)	<p>であれ、裁判に合法的な決着がつかない限り、本当の意味での執筆完了はありえないと考えていること《カポーティは前者の可能性のほうが高いと考えている》、連邦最高裁判所への上訴の可能性が残っていることを勘案すれば、少なくとも来年（1963年）の夏までは決着がつきそうではないと考えていることを伝える。</p> <p><Alvin Dewey宛>ペリーらの処刑日は10月25日に設定されたことを知らせるアルヴィンからの外電を受け取ったこと、10月1日にヴェルビエに戻る予定であること、10月15日に1週間前後の予定でロンドンとパリを訪れる予定であること、そのときにアルヴィンに電話をかける予定であることを伝える。また、アルヴィンの亡父がヴァレーヴューに埋葬されているのか、亡父の生年月日と没年月日はいつか、墓石の碑文には何と刻まれているのかを尋ねる【→196】</p>
10月20日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>昨日（10月19日）、一時帰国の準備が整ったところへ、ショーン氏、ホープ氏、サーフ氏から相次いで外電が寄せられ、《ペリーらの処刑が再び延期されたことを知って》帰国を中断したと伝える。『冷血』にはアルヴィンの視点が欠かせないと考えてきたので、アルヴィンには自分に代わって処刑の場面に立ち会ってほしいと伝える。</p>
30日(Verbier)	<p><Cecil Beaton宛>11月16日にパリへ、25日にロンドンへ向かうと伝える。</p>
12月11日(Verbier)	<p><Donald Cullivan宛>ペリーらに対する裁判所の最終決定が如何なるものであれ、近いうちにその決定が下されるであろうと予測していること、ペリーらと同時期に収監されたリー・アンドリューが先週処刑されたこと、ペリーにクリスマスの小切手を送り、カリヴァンについての情報を知らせたばかりであることを伝える。また、『冷血』については、出版時期のめどが立たず、もう1年ほどはかかりそうだと予測していること、全体の80パーセントを書き上げていることを伝える。</p>
14日(Verbier)	<p><Mabel Purcell宛>《メイベルはカポーティの実父方の祖母》来年（1963年）3月初旬にニューヨークに戻る予定であると伝える。</p>
22日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>マートル・クレア《事件当時のホルカムの女性郵便局長》とジョゼフィン・マイヤー《郡保安官代理ウェンドル・マイヤーの妻》から葉書が届いたこと、後者によると、カンザス州当局がウェンドル《ケニヨンの遺体の発見者》にペリーらの処刑に立ち会ってもらう意向であることを伝える。これに対し、アルヴィンではなくウェンドルであることが疑問であると述べたうえで、カポーティはアルヴィンに最高裁判所《カンザス州？連邦？》に関する情報を入手し次第、知らせてほしいと依頼する。</p>
26日(Verbier)	<p><William Shawn宛>『冷血』の執筆は順調であり満足し</p>

	<p>ていること、最近の情報を勘案すると、裁判の決着がそう先のことではなさそうであること、来年（1963年）の2月頃には見通しがつきそうであること、『冷血』の第三部の原稿を郵送するか持参するか決めかねていることと伝える。</p>
1963年	
1月 6日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>『冷血』の執筆計画に遅れを生じないように、1962年の大晦日も執筆に取り組み、10時就寝4時起床の毎日を送っていることを伝える。クラター一家の記念碑《カポティは1年以上前に基金に献金していた》について報じる新聞記事の切抜きを送ってくれたことに対して礼を述べる。最高裁判所《カンザス州？連邦？》の判決が待ち遠しいが、上訴したのはディックのみで、ペリーはまだ上訴の手続きをしていないと判断しているかどうか、アルヴィンの見解を尋ねる。自分としては、それが裁判を二倍に遅らせる彼らの策略だと考えており、クリフォード・ホープ氏にその点の調査を依頼したと伝える。</p>
11日(Verbier)	<p><Newton Arvin宛>『冷血』の4分の3（100,000語超）をもうじき書き終えること、2月末までには帰国の予定であることを伝える。</p>
14日(Verbier)	<p><Bennett Cerf宛>『冷血』の第三部の原稿を読んでもらう前に、最初の二部を再読しておいてもらいたいということ、第四部はそれ自体が一冊の本の分量であること、『冷血』執筆もいよいよ最後の追い込みに入ると実感していると伝える。また、税金上の理由で、『冷血』の前渡金として12,000ドルを支払ってほしいこと、6,000ドルずつの小切手2通に分けてヴェルビエに送ってほしいことを伝える。</p>
16日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>新聞の切抜きを送ってくれたことに對し礼を述べる。ここ数日間、ペリーとディック、及び最高裁判所《カンザス州？連邦？》に関する外電がとび込んでくるという思い込みにとりつかれていること、クリフォード・ホープが昨日（1月15日）ペリーとディックに面会しているはずだが、その結果を外電で知らせるようにホープに頼んでいたにもかかわらず、未だ連絡がないことを伝える。</p>
22日(Verbier)	<p><Alvin Dewey宛>クリフォード・ホープから漸く連絡が入ったこと、その中で、期待に反してペリーらが自分に処刑に立ち会ってほしいと望んでいるという報告を受けたこと、今後事態が悪化の一途を辿るようであれば、賄賂を使ってディックが自分とアルヴィンを証人に指定するように仕向けるつもりであること《ディックらが死刑となるよう、彼らに不利な証言をするという趣旨か？》を伝える。</p>
2月 4日(Verbier)	<p><Cecil Beaton宛>毎朝、3時か4時まで寝ずに、『冷血』の執筆に取り組んでいること、昨日（2月3日）、第三部を書き</p>

10日(Verbier)	<p>終えたこと、思い通りに仕上がったが、精根を使い果たしてしまい、第四部の執筆に取りかかるためのエネルギーをどう補充すればよいのかすら分らない状態であること、月末に帰国の予定であることを伝える。</p> <p><Newton Arvin宛>3月3日にヴェルビエを発ち、ブルックリンに戻ること、カンザス訛りに影響を受けたせいか、最近自分がよく"just"という単語を文章の中で使う傾向にあることを伝える。</p>
14日(Verbier)	<p><Bennett Cerf宛>『冷血』の第三部を書き終えたが、ぞっとするほどの緊張感に支配されてきたせいか、書き終えた2日間を泣いて過ごしたこと、第三部の原稿を読んだショーン氏は絶賛の外電を送ってきたが、サーフ氏にも感想を聞きたいので、事前に最初の二部を読み直しておいてほしいということを伝える。</p>
6月初旬	<p>ペリーらとの文通が認められる《カポーティに宛てた彼らの手紙は数百通に及ぶ》。</p>
7月20日 (Bridgehampton, N.Y.)	<p><Dewey夫妻宛>ペリーの弁護士であるロバート・ビンガムから、人身保護法に基づく聴聞会に出席し、ガーデンシティで行われた裁判がペリーらにとって不当であったと証言してほしい旨の依頼を受けたこと《カポーティは「私がどう答えたか、あなた方にも察しがつくはずだ」と述べているので、その依頼には応じなかったものと思われる》、10月20日頃カリフォルニアに向かうが、帰路ガーデンシティに立ち寄ることを伝える。</p>
8月 7日 (Bridgehampton, N.Y.)	<p><Perry Smith宛>リチャード・アヴェドンが撮影した写真とその他の写真（いずれも内容は不明）を送る。ネル（・ハーバー・リー）と電話で話したが、彼女が今日（8月7日）ペリーに手紙を書くつもりだと話していたことを伝える。ペリーから頼まれていた詩（R. W. Serviceの"The Men That Don't Fit In"）の一節を転写して送る。</p>
9月 8日 (Bridgehampton, N.Y.)	<p><Marie Dewey宛>11月5日にロサンジェルスへ向かい15日まで滞在したのち、空路、夫妻に会いに行く伝える。</p>
17日 (Bridgehampton, N.Y.)	<p><Cecil Beaton宛>ペリーらが新たな裁判を求めて連邦裁判所に上訴していること、もしその申請が受理されるようなことになれば、心身衰弱状態に陥りそうであること、聴聞会は10月9日に行われ、判断は15日までは下されること、自分としては連邦裁判所での再審理には至らないであろうと予測していること、もしこの予測どおりに展開すれば、（1964年の）春までには『冷血』の執筆完了に至るであろうことを伝える。</p>
12月15日(Brooklyn)	<p><Perry Smith宛>《自分の人生とペリーの人生に幾つか類似点があると述べたうえで、次のように続けている。》「私は一人っ子だった。年の割には体が小さく、学校ではいつも一</p>

	<p>番小さかった。3歳のとき父と母は離婚した《正確には7歳のとき》。父は（それ以降5度再婚した）旅回りのセールスマンで、私は子供時代の大半を父についてアメリカ南部中を旅して回った。父は私に不親切ではなかったが、私は父が嫌いだったし、今でもそうだ。（父の顔を見ることはまったくくない。ニューオーリンズに住んでいるからだ。）母は16歳で私を産んだが、美人だった。キューバ人の大金持ちと再婚し、私は10歳になって以降、母たちと一緒に暮らした（主としてニューヨークで暮らした）。不幸にも、母は何度か流産を体験したのちに精神障害を患い、アル中になってしまった。そのせいで私の生活は惨めなものだった。その後、母は自殺した（睡眠薬自殺だ）。私は16歳で学校を退学し、その後は自分で身を立ててきた。雑誌社の職を得たのだ（極めて幼い頃からものを書き始めていたからだ）。私は昔から知性と芸術面では早熟だった。情緒的には未熟ではあったが。もちろん、私は情緒的な問題に悩まされてきた。最後にきみに会ったとき、きみ自身が私に尋ね、そして私が正直に答えた、例の"質問"がその主たる理由だ（答えが不明であるというその点なのではない）《例の"質問"とは、ペリーがカポーティにホモセクシュアルなのかと尋ねていたことを指す》。</p> <p>以上は、大雑把な経歴だ。だが、私は本来、こんな秘密を誰かれ構わず漏らしてしまうような人間ではない。しかし、きみには何でも打ち明けられる。」</p>
1964年	
7月28日 (Bridgehampton, N.Y.)	<p><Dewey夫妻宛> ビリー・ワイルダー《アメリカ人映画監督・脚本家》が『冷血』の映画化に際し、ボビー・ラップ《クラター事件の被害者の一人であるナンシー・クラターのボーイフレンド》に映画化の権利譲渡を承認してもらいたいと考えているので、そうなるようアルヴィンからもボビーに働きかけてもらえないかと打診する《『冷血』は1967年にリチャード・ブルックスによって映画化されているので、ビリー・ワイルダーによる企画は実現しなかったものと思われる》。</p>
8月某日	<p>ニューヨーカー誌の事実検査係（fact checker）であるサンディ・キャンベル（Sandy Campbell）を連れてカンザスシティへ向かう。</p>
22日 (Bridgehampton, N.Y.)	<p><Bennett Cerf宛> 『冷血』がほぼ完成したこと、同年の冬に書く予定の小説《不明》のアウトラインを作成するために、2、3週間『冷血』の執筆から離れる予定であることを伝える。</p>
9月1日 (Bridgehampton, N.Y.)	<p><Dewey夫妻宛> ディックが最高裁判所《カンザス？連邦？》に宛てた88頁もの手紙を送ってきたので、そのコピーを夫妻にも送る予定であると伝える。</p>
11月22日(Bridgehampton, N.Y.)	<p><Mary Louise Aswell宛> 『冷血』の最後の30～40頁を書</p>

12月23日(Verbier)	<p>き上げるために12月20日頃、スイス（ヴェルビエ）に向かう予定であると伝える。</p> <p><Sandy Campbell, Donald Windham宛葉書>ヴェルビエに到着したと伝える。キャンベルに毎週火曜日のニューヨーク・タイムズに注意を払うよう依頼する《ディックとペリーは有罪判決の再審理を求めており、裁判所はこの請求の適否について検討中だった。その検討結果が毎週月曜日に報告され、その要旨が火曜日のニューヨーク・タイムズに掲載される予定になっていた》。</p>
28日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>クリスマスも『冷血』の執筆に専念したこと、大晦日も新年もそうなるであろうと予想しているということ伝える。ヴェルビエに到着して以降、ペリーらから便りはないが、彼らがニューズウィークの記事《1964年12月28日付の"The Fabulist"を指す。その記事はカポーティがクリスマス前にニューヨークのポエトリーセンターで行なった『冷血』の朗読会について報じており、その中でディックは「実利主義的な怪物」と形容されている》を読んだとしたら、二度と彼らから便りが来ないだろうと印象を述べている。</p>
1965年	
1月 9日(Verbier)	<p><Dewey夫妻宛>2月末にローマに向かう予定であること、ディックとペリーから長い手紙《内容不明》が届いたこと、この手紙が着く頃には連邦最高裁判所がペリーらの再審理請求の適否についての判断を下し終えていると予想していることを伝える。</p>
13日(Verbier)	<p><Sandy Campbell宛>裁判所は2月いっぱい休廷期間となるので、現時点で1月の残りの月曜日は18日と25日のみであること、ニューヨーク・タイムズの記事に注目し、両日の報道内容について（関連記事が掲載されていない場合もその旨を）外電で知らせしてほしいということ伝える《1964年12月23日付の手紙参照》。</p>
19日(Verbier)	<p><Sandy Campbell宛葉書>外電を受け取ったことを知らせる《同年1月18日、連邦最高裁判所はディックらの再審理請求を却下した》。</p>
24日(Verbier)	<p><Perry Smith宛>再審理の請求が却下されて気の毒だと伝える。ロバート・ビンガム《ペリーの弁護士》の住所と電話番号を教えてほしいと依頼する。ペリーが自分の信仰について尋ねたことに答えて、自分はどの教会にも属していないこと、正式な意味でのキリスト教信者ではないこと、かつて（そして今でも幾分か）東洋の宗教に魅かれたことがあり、仏教に傾倒したことなどを伝える。</p>
27日(Verbier)	<p><Cecil Beaton宛>『冷血』の最後の数頁を書き上げるために、毎日8～9時間を執筆に充てていると伝える。</p>

27日	処刑の日が2月18日に設定される《刑の執行はその後5度目の延期を経て4月14日に執行される》。
2月 2日(Geneva)	＜Sandy Campbell宛＞ペリーらの処刑が新たに2月18日に設定されたこと、自分は処刑に立ち会わないと決めたが《実際には立ち会わざるを得なくなる》、アルヴィン・デューイが自分の代理で立ち会うということを伝える。18日の朝、アルヴィンがサンディに電話をかけ、電話口で処刑に関するカンザスシティ・スター紙（朝刊）の原文を読み上げることになっているので、それを一語一句書き留めて、外電で送ってほしいと依頼する。その外電を受け取って数時間のうちに、『冷血』の原稿が完成するはずだとも伝える。
7日(Verbier)	＜Sandy Campbell宛葉書＞最高裁判所がペリーらの処刑延期請求を受理したこと、それにより、3月か4月までは、新たな進展が期待できないことを伝える《2月は裁判所が休延期間に入るため》。
	＜Dewey夫妻宛＞昨日（2月8日）、ジェンキンズ氏《ビンガムと一緒に、ペリーらの弁護を担当するカンザスシティの弁護士》の思惑を探ろうとして長電話をしたこと、その結果、彼が最高裁判所に異議申し立てのリストを送付したこと、カンザス州弁護士協会は彼らを完全に支持していること、再審理の可能性は残っており、もし再審理が実現すると、ペリーらに有罪を宣告することは出来ないであろうと考えているとの情報を得たと伝える。2月末に1週間ほどローマで過ごすことと伝える。
18日(Verbier)	＜Donald Windham, Sandy Campbell宛葉書＞本日（2月18日）、『冷血』の重要な1、2頁を除く全てを書き上げたこと、3週間後には帰国することを伝える。
20日(Verbier)	＜Bennett Cerf宛＞昨日（2月19日）、『冷血』の数パラグラフを除く全てを書き上げたこと、ペリーらの処刑予定日が延期されたが、あとは時間の問題であると考えていることを伝える。
20日(Verbier)	＜Sandy Campbell宛＞サンディがアルヴィンに書き送った52件の質問事項にアルヴィンが困り果てていると知らせしてきたこと《ニューヨーカーの事実検査係のサンディは、『冷血』が事実には忠実であることを立証する目的で、アルヴィンにそれらの質問を寄せていた》、アルヴィンは体調がすぐれず、過労気味でもあり、答えられる範囲を超えた質問への回答は無理であること、アルヴィンはこれまでも自分のせいで2度失職しかかったこともあることを伝える。
20日(Verbier)	＜Dewey夫妻宛＞アルヴィンに対し、サンディの質問に思い悩むことがないようにと励ます。重要な数パラグラフを除き、『冷血』を書き終えたこと、第四部が140頁に及んだこと、ショーンから絶賛の外電を受け取ったこと、ローマに出かけるが3

備忘録：『冷血』執筆の足跡

3月20日(Verbier)	月5日にヴェルビエに戻り、3月20日頃帰国する予定であることを伝える。
4月14日	＜Cecil Beaton宛＞『冷血』書き終えたこと、明日（21日）帰国することを伝える。
19日(Brooklyn)	ディックとペリーが処刑される。 ＜Cecil Beaton宛＞裁判が終了し、『冷血』が来年（1966年）1月に出版されることになったこと、ペリーらの要望を受けて、彼らの処刑に立ち会ったことを伝える。